神奈川県・私立
自修館中等教育学校

学校改革

授業改革と振り返りシートで教師の意識が変わる

◎1999年設立の私立の中等教育学校。兄弟校に100年の歴史を持つ向上（こうじょう）高校がある。「明知」「徳義」「壮健」を建学の精神として、自学・自修・実践できる「生きる力」の育成を目指す。教養主義を打ち出し、文理に偏らず6教科7科目に対応できる幅広い学力の習得を目指す。

設立
1999（平成11）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約120人

09年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道教育大、岩手大、東京学芸大、東京工業大、横浜国立大、高崎経済大、横浜市立大などに16人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、立命館大などに延べ306人が合格。

住所
〒259-1185 神奈川県伊勢原市見附島 411

電話
0463-97-2100

Web Site
http://www.jishukan.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎日常業務の多忙化により、教材研究など授業力向上に必要な時間が不足
STEP 1

実践
◎時間割の変更、習熟度別授業の整理など、大胆な学校改革を若手教師中心に推進
STEP 2

成果
◎教師の意識が授業改善へと向き、模試の活用など学年独自の取り組みも始まる
STEP 3

日常業務の多忙化が授業の質向上を阻害

日常業務に追われ、授業の準備や教材研究に時間をかけられないことに悩む教師は多い。神奈川県伊勢原市にある自修館中等教育学校は、大胆な制度改革とカリキュラム改編を行い、この課題に真正面から取り組んできた。

同校は、1999年に開校した私立の中等教育学校だ。1期生は、募集定員90人（30人×3クラス）に対して入学者は54人。偏差値が30台前半の生徒も含まれ、学力的に厳しい状況だったが、3期生が受験した07年度入試では一橋大、自治医大の合格者が出た。続く08年度入試では、東京大の合格者が輩出。生徒の進路希望に応えられる進学校として、地元で広く知られるようになった。5期生からは募集定員を120人に拡大。大学入試合格実績も年々伸び、5期生（09年度入試）では、国公立大合格者は1期生の2人から16人に、早慶上智と東京理科大は1期生0人から20人に、GMARCH（＊）は1期生1人から79人になった。

開校以来、順調に発展してきたように見えるが、教師の危機意識は強い。進路情報室長の川澄勤先生は次のように振り返る。

「3、4期生の入試実績が好調だったのは、生徒の実力によるものでした。地域の信頼を得るためには、勉強に自信がない生徒の志望

＊GMARCHは、学習院大（G）、明治大（M）、青山学院大（A）、立教大（R）、中央大（C）、法政大（H）を示す

も実現させ、安定した進学実績を上げることが欠かせません。特に本校は、教師の平均年齢が約34歳と若く、経験面で伝統校に及びません。本校の更なる発展には、授業の質を高める努力が必要だと考えていました」

質の高い授業をするためには、準備や教材研究を入念に行う必要がある。1回1回の授業を検証し、改善を加えることも大切だ。しかし、行事が重なって臨時の時間割が多い、習熟度別のクラス編成のため受け持つ授業の種類が多いといった理由により、一つひとつの授業の準備に時間をかけられないという実情があった。授業力向上のためには、これらの課題に正面から向き合い、抜本的な解決を図る必要があった。

保護者からの支持が校内の合意形成に結び付く

転機が訪れたのは05年度のことだ。この年に着任した東野眞元（まこと）校長が改革を望む若手教師を集め、改革の素案づくりに着手したのである。

当初は若手教師の有志5～6人の小さなプロジェクトに過ぎなかったが、テーマに応じてほかの教師の意見を聞いたり、議事の進行状況を公開したりするなど周知に努めた結果、06年度には「改革推進委員会」に格上げされ、有志の委員は12～15人となった。

毎週月曜の19時から行う委員会では、カリキュラムや習熟度別授業、学校行事、部活動、校務や会議の進め方など、あらゆることが議題となった。委員会は次第に熱を帯び、終了時刻が22時を過ぎることも珍しくなかった。

ただ、急進的な改革に疑問を抱く教師もいた。改革の中心的存在だった川澄先生は、当時、赴任5年目。そのほかの委員も20～30代の若手教師がほとんどだった。「経験の浅い教師が中心となって改革を進めるのは納得出来ない」「学校のことをよく知らないのに、どのように改革するのか」という声が上がった。

「開校当初から尽力されてきた先生方にとって、若手教師に学校を変えられることは、自分たちのしてきたことを否定されているようなものであり、批判するのは当然だと思いました。反対意見がある中で、同意を得ずにシステムだけを変えても実効性は薄いと思いました。委員会発足後の2年間は、改革の議論と並行して、先生方への周知、説得にも努めました」（川澄先生）

委員は、反対意見に対する回答を丁寧に何度も行い、思いを伝えると共に、生徒のアンケート結果などの客観データも活用し、「改革の必要性」を訴え続けた。同時に、保護者への説明も怠らなかった。当初、保護者の間にも学校改革を不安視する声があったからだ。保護者説明会を開き、改革の狙いを説明するだけでなく、「もっと話を聞きたい」「こういうことをしてほしい」という保護者に対しては、少人数の懇談会を何度となく設けて周知に努めた。少数意見にも耳を傾け、丁寧に説明することで、次第に理解を示す保護者が増え、それに呼応するように校内の反対意見もなくなっていったという。

前回の授業の反省を次回の授業に即時反映

08年度、ついに新たなカリキュラムを導入した。大きな変更は、授業時間の増加だ。それまで、授業は週5日で、午前が1コマ80分・50分・80分の計3回、午後は月・水・木が1コマ50分・80分の計2回、火・金が50分の1回だった。それを、08年度には、週6日（月曜日から金曜日は6回、土曜日は4回）、すべて1回50分として、総授業回数は23回から34回へ、総授業時間は1540分から1700分に増やした。

また、学力をバランス良く付けさせるため、

自修館中等教育学校
川澄 勤 Kawasumi Tsutomu
教職歴12年。同校に赴任して9年目。進路情報室長。「苦しいのは自分に負けているから」

自修館中等教育学校
海老名豊昭 Ebina Toyoaki
教職歴10年。同校に赴任して9年目。第5学年主任。「他人を動かすには、まず自分から」

＊プロフィールは取材時（2010年2月）のものです

選択科目は文理の垣根を出来る限り低くした。

「受験に必要な科目かどうかという考え方は、社会に出れば全く意味がありません。文理いずれかに偏らず、教養をバランス良く積み上げ、大学進学後も通用する学力を身に付けてほしいと考えています」（川澄先生）

教師が授業改善に取り組みやすい環境も整えた。同校の前期課程（中学1～3年）は1学年4クラスだが、1人の教師が同一学年を担当し、各クラスに対して同じ授業を1日4回行えるような体制とした。以前は、1人の教師が2～3学年にまたがって授業を受け持っていた上に、習熟度別授業が加わり、担当する授業が4種類にも5種類にもなっていた。授業のほとんどは1回きりのものとなり、反省を生かすチャンスは巡ってこない。同じ学年で同じ授業を続けて出来るにしても、1、2日と空くと、反省を次の授業に生かそうという意識はどうしても薄れてしまう。

そこで、1人当たり、多くても2つの学年の担当とし、習熟度別授業は後期課程（高校1～3年）で行うことによって、1日に4回、同じ授業を行える体制と時間割とした。この方法ならば、教師は同じ内容の授業を続けて4回行うので、前の授業の反省をすぐ次の授業に生かせ、更にクラス間で進度のズレが生じることも少ない。受け持つ学年が少なければ、それだけ一人ひとりの教師に課せられる責任も明確になる。

「授業力を高めるには、教師も失敗を積み、試行錯誤を重ねることが重要です。ただ、失敗を失敗として自覚するためには、十分に授業の準備をし、全力で授業に取り組むことが大前提となります。全力で取り組んだからこそ、何が駄目だったのかを本気で考え、改善に向けて努力出来るのです」（川澄先生）

「振り返り」を重視し生徒に自分の課題を発見させる

一連の改革により、授業の準備やLHRなどにかける時間が、以前よりも格段に増えた。今は、その時間を指導改善に生かす動きが広がりつつある。

現5学年（高校2年）では、08年度から、模試や定期考査、学校行事や家庭学習など、さまざまな場面で、生徒に「振り返り」をさせる機会を設けている。以前は不定期だったLHRが週1回きちんと実施できるようになって、可能になった取り組みだ。「振り返り」では、学校独自の「振り返りシート」を使う。例えば、模試ではどれだけ事前準備をしたのか、結果からはどのような課題が見えてきたのかを記入させる（**図1**）。5学年主任の海老名豊昭先生は、その狙いを次のように説明する。

「模試の『振り返りシート』は、模試を通して生徒が自ら弱点を見つけ、克服する過程を体験させることが狙いです。更に、教師の意識改革を促す上でも重要だと考えています。教師の中には『模試は実力を測るためのものであり、事前対策をすべきではない』という声もあります。しかし、『振り返りシート』の運用を通して、模試の役割を再確認し、模試も活用しながら生徒を学びに向かわせる工夫をしてほしいと考えています」

定期考査では、試験2週間前に試験範囲の一覧と対策のアドバイスを記したプリントを配り、事前に計画を立てさせる。試験後は、「振り返りシート」に「試験勉強として成功した学習方法」「来学期にやるべきこと」を記入させ、学習方法が適切だったのかを確認させ、次のアクションにつなげさせる。

ユニークなのは、「学期ごとの振り返り」だ。授業の準備や家庭学習の取り組み方を記入させ、家庭学習の重要性を意識させるだけでなく、学校生活にかかわる質問も投げかける（**図2**）。

「『ルールを率先して守ったか』『（魅力ある先輩と比較して）自分に足りないものは何か』など、自分の生活を確認させることは、それらが出来ている生徒は自信や安心感が得られます。出来ていない生徒にとっては、これから何を意識して学校生活に臨めばよいのかを自覚するきっかけになります。こうした『振り返り』の機会を大切にすることが、ひいては学校への帰属意識や、落ち着いて勉強に取

り組む意識を育むことにつながっています」（海老名先生）

模試対策に主体的に取り組む教師が増加

「振り返りシート」の内容は、担任がクラス通信に傾向や動向をレポートしたり、生徒の感想コメントを掲載したりして必ずフィードバックし、振り返りの作業が指導に生かされていることを、生徒に実感させる。

シートでは、「自分で問題演習をした」「公式の確認は」など、項目をできるだけ具体的にし、「した・しない」のいずれかに「○」を付けるようにする。生徒が記入しやすくなると共に、模試の対策には何が必要なのかを意識させるための工夫だ。

「勉強をしなくてはならないとは分かっていても、どこから手を付けてよいか分からず、行動に移せない生徒は多いです。出来るだけ具体的に記述させることで、振り返りの方法を身に付けることが出来れば、受験が迫った時、自分で課題を見つけ克服出来る力が身に付けられるのではないかと期待しています」（海老名先生）

ただ、教師が手取り足取り細かく指示を出し過ぎると、生徒自身の考える機会を奪うことになりかねない。今後の課題は、生徒の自立の度合いを見ながらいかに手を離していくかだ。

そして、いまだ教師の意識改革も道半ばであるという。自主的に模試の事前対策に取り組む教師は増えているものの、教材研究や入試分析などは基本的に個々の教師に任されており、指導力の格差はむしろ拡大傾向にあるという。

「生徒の学力に関することは、すべて教師の責任です。個々の教師の力量にかかわる問題であり、学校全体のシステムや制度の改善だけでは限界があります。学校は一に人、二に人、三に人。1人でも立ち止まれば、すぐに停滞してしまいます。すべての教師が不断に授業力を磨き続けることが、真の学校改革なのではないでしょうか」（川澄先生）

図1　「振り返りシート」模試の記入例

模試の前に配布した「『アドバイス』プリント」を読んで「自分はどんな勉強をしたのか」、その結果、「模試はどのような成績で、次の模試に向けて自分には何が必要なのか」を考えさせる
＊自修館中等教育学校の資料を基に編集部で作成

図2　「振り返りシート」学校生活の記入例

学期の終わりに、前の学期末に決めた「必ず実践すること3箇条」への反省、学習や行事などでの自分の行いを振り返らせ、次の学期の目標を立てさせる
＊自修館中等教育学校の資料を基に編集部で作成

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2006年12月号指導変革の軌跡「**神奈川県・私立桐光学園中学校・高校**」など
▶▶▶***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）